

慈しみはどこへ行った？

阪大・京大などへの進学実績を誇る仏教系の私立清風高校で事件が起きた。2021年12月、当時2年生だった男子生徒が期末試験でのカンニング行為が発覚、数名の教師から「卑怯者」と厳しく叱責を受けた2日後、自宅で自殺した。保護者は指導の行き過ぎが自殺の原因だったとして、清風高校を運営する学校法人清風学園に対して、1億円の損害賠償を求めて提訴し、今年5月に第一回口頭弁論が始まった。

男子生徒は、「卑怯者と思われ続けて生きていく自信はない」と遺書を残して自殺した。学校側が設置した第三者委員会は、教師の「カンニングは卑怯者がすることだ」と言う指導に対して「全人格を否定するような強い決めつけを感じさせる」としながらも、「指導が自殺に至った原因とは認定できない」と結論づけた。当然学校側は「卑怯者」と言った指導の事実を否定し、過去にこのような生活指導をして生徒が自殺した例はないと奇妙な反論で争う姿勢を強調した。

指導の事実関係がどうであったのか知る由もないが、生徒を厳重に処罰したことには言及したい。「全科目0点」「家庭謹慎8日、その間の友人等との連絡の禁止」「写経80巻」「反省文と反省日誌の作成」そして「学校推薦は行わない」という驚愕の内容である。しかるべき処分を学校が下すことに異論はない。「賞罰規定」もあるだろう。だが、処分は生徒に反省を促し、その後も前向きな学校生活を送れるようにするための言わば更生的側面を持たなければならない。次の定期テストで全科目に満点に近い点数を取らなければ、生徒の成績は平均に届かない。過ちを悔い前向きになるには友達存在は貴重である。写経は一巻で1時間以上は要するらしく80時間以上の作業を強要している。反省文は当然だろうが、「推薦をしない」ことで生徒の希望校への大学進学は間違いなく遠のいた。処分内容は過酷で過ちの反省を促すレベルを超え、生徒の明日(みらい)へのかすかな希望も奪い、まるで「無言の退学勧告」にすら感じる。

私は通信制高校に関わりながら、学校は生徒の「とりつく島」であるべきといつも思ってきた。故に教師(学校)は生徒を傷つけてはいけない。自殺した生徒は「卑怯者」のレッテルを貼られ傷つき、過酷な処分の内容に絶望したに違いない。そのとりつく島の根源は教師の「慈しみ」であり、仏教の精神にも過ちを許し寄り添う慈悲の教えがある。清風高校は仏教の教えを大切にしているはずだ。その慈悲の心がない指導は、生徒にとって心の暴力以外の何もでもないと言うのは言い過ぎだろうか？

(丹羽 豊)